

教職あらかると

わたしの道徳授業 No.3

2020.05 後藤 忠

<わたしの道徳授業 8月号 1980年>

1 PLAN DO SEE

計画、実践、評価というパターンでいつも自分の授業をしていけば、ずいぶん力がつくだろうと思う。

しかし、日々これを行うことは不可能と言えよう。単純に不可能と言ってしまえばそれまでだが、私の場合、能力から週案が精一杯のところである。実践はともかく、評価などはおろそかにしている。それが現実である。評価のころには次の計画に注意がうばわれているからである。それに加え、性格がととも横着でなまけ者であるから細かいめんどうな仕事は大の苦手である。

それでいながら、PLAN DO SEEは大事だと頭の中では思っているのである。分かっちゃいるけどできない悩みは、何も子どもだけのことではないのである。

過去の研究授業を数えたら、7年間で12回行っている。そのうち道徳授業は6回である。しかし、残念ながら私の最大の欠点である整理・整とんの悪さから授業案や指導記録を散逸してしまっている。今となっては本当に惜しい気持ちでいっぱいである。後悔先に立たず、今後きちんとファイルしておこうと思う。

そんなわけで授業記録はとても大事である。私はまめな人ほどの確な、自分に合った進歩をとげることができると思っている。

計らずも、最初の道徳の研究授業記録が残っていたから、今こうして詳しく省みることができるのであり、省みて自分を評価し、次の発展に踏み出すのである。

2 授業研究のメリット

普段の授業はどうしても安きに流れてしまう。既成の読み物資料か、スライド、またはテレビを用いて、経験てきにパターン化した指導過程にたよって発問もろくに吟味せぬままに授業を行う場合が多い。これは仕事柄やむをえないことである。道徳ば

かりやっているわけにはいかないからである。

また普段、授業記録を残すのは大変むずかしい。テープレコーダーで録音して後で再生するか、授業中に子どもに書かせたものを残しておく以外に方法はない。

しかし、研究授業になると少し様子が違ってくる。「研究授業だからと言って、ことさら特別な授業をする必要はない。普段どおりの授業をすればよい」と言う人もいるが、私はそうは思わない。研究授業だからこそ、普段できない授業をやるべきだと思う。参観者を無視しては授業研究は成り立たない。

参観者はいろいろな問題意識をもって授業を見にくる。

- ・道徳の授業を見たことがない。1度見てみたい。
- ・あいつは俺の友達だから応援に行こう。
- ・新卒の道徳授業ってどんな授業をするのかなあ。
- ・あの先輩の胸を借りて一太刀打ち込んでみよう。
- ・発問と児童の反応に注目して授業を見よう。
- ・資料提示の仕方を見よう。
- ・学級経営はどうか見よう。

このほかにも、児童の発言のとり上げ方はいかが、個別指導はどうか、共同思考はうまくいっているかなど、一人一人違う問題意識をもって参観している。ある参観の先生は、ご自分が座られた席のすぐ横の子どもの一挙手一投足を1時間中克明にメモされ、研究協議会でそれを示してくださった。これには驚いたと同時に、発言した児童だけによって授業が進んでいくことへの警鐘と受けとめた。

このような参観者の目を自分の糧にすればよいのである。

「計画」の段階では、十分参観者を意識して真剣に指導案を立る。

「実践」では、指導上特に留意しなくてはならないことを具体的に意識して授業を進める。

「評価」、すなわち研究協議会では、参観者からさまざまな観点からの意見をいただく。

指導講師には、自分の授業について具体的にご指導をいただくのだから、これ以上恵まれたありがた

い機会はない。

授業記録は教師の発言のすべて、児童の反応、板書、時間配分などを克明に記録してもらえる。場合によっては、前に述べたように児童を選び、1時間中その児童の記録をとってもらうこともできるであろう。

余談であるが、研究協議会や講師の指導助言の内容が自分の理解を超えていて分からないことがよくある。そんな場合は軽率な判断などせず、何も考えないで迷わず発言どおり忠実にメモすることである。後で時間をかけて吟味理解すると分かる貴重な言葉や内容がないとも限らない。中には、いくら吟味してもやっぱり意味がなかったという内容もあるが、それはそうと分かったときに棄てても、別に遅すぎることはないであろう。ただし、棄てるときには十分理由づけをしてから棄てなければ、発言者のせつかくの誠意に対して失礼である。

要するに、今まで言いたかったことは、研究授業は現在自分もっている全能力を全開ではたらかせ、それを吐露せよということである。質の高低など、この際問題ではない。いや、問題にしてもしょうがないのである。そして、自分の指導力を向上させるために参観者の力をよい意味で利用せよということである。そして半歩でも今までの自分より前に進むことができたなら、それが参観者に対するせめてもの恩返しになるのだと思う。

3 初めて立てた指導案（第1次案）

私の初めての道徳研究授業の記録は、本番のものだけでなく、その前に他のクラスを借りて苦闘した2回分から残っていた。

◎ 資料「ニコラスとウェーク」のあらまし

<前半>

昔のイギリスでの話である。ロンドンにウェストミンスター小学校があった。当時の小学校は全員寄宿舎に入る制度で、しかもとてもきびしい教育をうけていた。担任のマイケル先生は特にきびしい先生であった。

ある日、先生がいない時にニコラスは過って教室の幕を破ってしまった。

「この幕を破ったのは誰ですか。」

ニコラスはおそろしさのあまり名のり出ることができない。親友のウェークは—ニコラス早く立て。あやまれ—と心の中で叫びつづけるがニコラスは黙っている。

先生は一人一人たずねていくことにした。ニコラスの番になった。ニコラスは小さな声で、「ぼくではありません。」と答えてしまった。—もうだめだ、ニコラスは幕を破ったうえにうそまでついてしまった。もしこのことが分かったら退学させられてしまうかもしれない。それにニコラスの父親はおこってニコラスを家からおいだしてしまうだろう。そう考えてウェークは悩んだ末に自分が身がわりになると決心した。

しかし、「ぼくです。」と言うと先生に嘘をついてしまうことになる。彼は返事をしないでだまって立っていた、「先生すみません」と心の中でつぶやきながら。

ウェークはみんなの前でムチ打たれた。ニコラスは自分が打たれる以上につらかった。

授業が終わって、みんなはウェークを英雄のようにかつぎ出して、寄宿舎に帰った。

一方のニコラスは完全に自己卑下に陥って部屋で泣いていた。

場面 13

そんなニコラスのもとへウェークがやってきてなぐさめる。ニコラスはウェークに改心を誓うのだった。

<後半>

それから40年後、イギリスは王党派と議会派に分かれてあらそっていた。長い争いの後、議会派のクロムウェルが勝ち、反対派の重臣たちをつぎつぎに捕らえて重罪にしていた。

ウェークは王党派の大佐として戦争に参加していたが、仲間とともに捕らえられてエクセターの牢に入れられた。ウェークたちの裁判にはロンドンから大法官がやってきて、裁判が始まった。大法官はあのニコラスだったのである。

ニコラスとウェークはじっと見つめ合った。ニコラス大法官は小学校時代のことを思い出していた。やがて調べが終わるとニコラスは大声で判決を言い渡した。

「罪人一同、4日のうちに死刑に処す。」

部屋に帰ったニコラスは召使に大急ぎでエクセターの町で一番速い馬を用意させ、300kmの道を一路ロンドンへと急いだ。

2日目の朝早くロンドンに着くと、すぐにクロムウェルの家に行った。

「私の一生のお願いです。ウェークをゆるしてやってください。私を代わりに死刑にしてください。」

ニコラスは少年時代の思い出を涙ながらにクロムウェルに語った。その話を聞いたクロムウェルはおおいに感激し、

「わかりました。あなたの美しい願いをしりぞけることはわたしにはできません。」

クロムウェルの書状を持って、ニコラスは再び馬上の人となった。エクスターへ、エクスターへ。

私はこの資料の前半だけを授業で使おうと思った。前半のウェークの葛藤の様子から深い友情を考えさせようとした。すなわち、後半など用いなくても、前半のウェークの行動や気持ちを考えさせたり、どんな行動をとるべきかを想像させたりすることで、「友達（ニコラス）の性格や立場に対する深い理解と同情を感じとらせる」ことができると考えたからである。

この発想は最後の最後まで棄てられなかった。どうしてこのような発想にとらわれていたのかは今となってはよく分からず、想像するしかないが、たぶん、ある事柄を深く考えさせようとする場合、よけいなものをできるだけ省き、1点だけ示して、そこに集中させる方が効果的だと思ったからだろうと思う。これは体育などでよく使う分習法で、例えば障害走のぬき足だけを何回も反復して練習させると、その技能が習熟する。こんなところから発想したのではないかと思う。

しかし、資料の用い方やあつかい方によって、子どもの考えが玉虫のように変わることに驚いた。

<第1次案>

私が立てた第1次案を見て宇戸先生は、ご自分のクラスでこの指導案どおりに授業をしてくださることになり、私は不安と期待に胸ふくらませて授業を参観した。

【授業の実際】

- 1 友人関係について話し合う。
- 2 スライド12場面までを見て話し合う。

スライドの前半場面は13場面までであるが、13場面を隠して、その後のウェークの行動を様々な想像させると子どもたちは興味をもつのではないかと考えた。子どもたちにいろいろな意見を出させてから13場面を見せて話し合わせようと思った。

◦寄宿舎に帰ったニコラスはどんな気持ちでいるか。

◦寄宿舎でウェークはニコラスにどうしたと思うか。

3 13場面を見て話し合う。

◦ニコラスはどんな性格か。

◦ウェークは先生に対して黙っていたのはなぜか。

「ニコラスを助けるために黙っていた。」という考えが返ってきた。

◦ウェークのえらさは何であろう。

えらいか、えらいか、えらいか、えらいかは子どもが決めることだと考えられたのであろう、宇戸先生はここで「ウェークはどんな人か」と問われた。「勇気がある、友達おもしろい、正直」という発言が返ってきた。

◦身がわりになろうとしたことだけがえらいのか。

私はこの発問で、ウェークはニコラスの性格や家庭の事情までよく知っていて、彼の立場を十分理解しているからこそ身がわりになった、という動機に気付かせたかった。ところが…。

C：うそをつかなかったところがえらいと思う。

C：勇気があるところがえらい。

C：ウェークのような友達がいたら、ぼくはそんなをすると思う。なぜなら、ついたらよってしまって自分の悪いところを変えられないからだ。

今までとはまったくちがうこの発言に子どもたちは揺れだし、授業の流れが大きく変わった。

C：それもそうだ。

C：やっぱりウェークは正直じゃないのかもしれない。

そこで宇戸先生は十分話し合いをさせた後、「ウェークはなぜ身がわりになろうとしたのだろう。」と指導案にない発問をされた。

やっと子どもたちも「ニコラスは退学させられるかもしれない」「ニコラスの父は厳しい人だから家を追い出されるかもしれない」「ニコラスの性格をよく知っていたからだ」と、ウェークの行為に対する見方の深まりがみせた。

その後、感想を道徳ノートにまとめさせたが、期待したものは少なかった。

◇ スライドを見たときの一人一人の子どもの目のつけどころは千差万別である。スライドを視聴する観点を示す方がよい。

◇ 子どもの意識が正直の価値に流れて行ったのは、子どもは「発問」をどのように受け止めるか、どんなことを考えるかについて、私は十分把握していなかったためである。

◇ 発問を作るときは語句の言いまわし一つ一つを大切に作り、子どもの側に立って反応を予想しておかなければならない。子どもが考えやすい発問を作ることの大切さと難しさを感じた。

第1次案で行った授業の反省をもとに第2次案を作成した。指導の流れは第1次案とほぼ同じにして、発問の言いまわしを若干変えて、今度は私が5年2組の田中弥文先生の学級で授業を行った。紙面の都合上詳細については省略するが、やはり失敗に終わった。

こうなるもともと根本的な誤りがあるのではないかと思えた。前に述べたとおり、この資料は前半だけ使うだけで十分だと考えていたが、資料の内容をよく検討してみると、ウェークの葛藤は深いとその葛藤の要素は単純であることに気づいた。友達と助け合うことの素晴らしさを感じさせることに重点を置くならば、むしろ後半まで視聴させる方が効果的であると考えた。

また、ねらいに直接迫る発問が効果的であるためには、それまでの事件の推移の節々にあるできごとや、そのときの登場人物の気持ちや考えを子どもたちにつかませておく必要があることにも気づいた。

その節々のおさえが欠如したままでは脱線している子どもを救うことはできないし、資料把握能力に劣る子どもには、はなはだ不親切な指導となる。

もう一つ、発問の主語（ニコラス、ウェーク）が代わる代わる交互に変えられたら子どもの思考は混乱しやすく、どちらの方を考えたらいいか戸惑ってしまうような現象が見られた。したがって、どちらか一方に発問を絞って組み立てを考えるか、発問カードを示すかする必要がある。

2回の授業から、以上のような多くの勉強をさせてもらった。それに失礼だと思うが、2組の子どもを相手に授業をしたとき、私は本当にやりずらかった。だれがどんな考えをするか分からないからである。本番前に2回も授業をしたら、うまくなるのはあたりまえだと思うが、やはり道徳は自分のクラスでなければだめだと思った。

4 本番の組み立て

1 ねらい

友達の立場をよく理解し、仲良く助け合おうとする心情を養う。

2 展開

学習活動と主な発問	指導上の留意点・意図
<p>1 友人関係について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気まずかったこと ○ 助けられたこと 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表が少なかったときは用意した作文を読む。
<p>2 スライドを場面12まで見て話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 寄宿舎に帰ったニコラスの気持ちについて ○ ウェークはなぜ黙っていたのか ○ これからニコラスはどうなると思うか 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 視聴する観点を示す。(登場人物の性格や行い) ○ 様々な角度からニコラスの自己卑下を想像させる。 ○ ニコラスの立場をよく理解しているウェークに気づかせる。 ○ ニコラスの行為を様々な想像させることによって次への興味づけを行う。
<p>3 場面13を見て話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「もっと勇気のある人間になる」と誓ったニコラスはどうして変わったのか。 ○ ウェークのえらさはむちで打たれることを知っていて身がわりになった「勇気」だけだろうか。(バズセッション) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ニコラスが改心した理由をウェークの側から考えさせる。 ○ 単なる勇気だけではない友達の理解と思いやりのある深い友情に気づかせる。
<p>4 スライドの後半を見て、感動した事柄をノートに書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話し合いはせず、一人静に感動を味わわせる。

5 反省にかえて

ふりかえれば、実に未熟な指導であった。しかし、あの時点では精いっぱい授業であったと自賛？している。

たった1時間の授業に、これほど多くの時間を費やしたけれど、この期間はいつも具体的な問題意識が持てたし、読む本、聞く話がとてもよく分かった気がする。

それにもまして、同学年の先生方、墨田区道德部の先生方の骨身を惜しまぬご指導には深く感謝している。

わたしの道德授業の第1段階はこの時点で終わる。メチャクチャな第1次案から、少しずつ子どもの考えの流れに合った発問の組み立てや表現のし方を工夫することができた第3次案（本番案）まで、

たくさん勉強させていただいた。

私生活においても、会う人、会う人をつかまえては発問し、反応を確かめていた。そんな折、たまたま義父が家に訪ねてきたので、この物語を読ませ、苦勞していた発問をしたところ、

「何がえらいものか。今の道德教育はうそつきを教えているのか。昔の修身は…。」

と、えらい剣幕ではじまった。

義父は旧陸軍士官だった人で、

「いや、これは友情の美しさの話でありまして…」

しどろもどろ、冷汗三斗の思い出である。

(東京都世田谷区立東大原小学校教諭)